

いのちと地域を守る



防災運動会で行われた「災害時借り物競争」。視覚障害者役はアイマスクを着けて臨んだ。6月23日午前、仙台市青葉区の宮城教育大付属特別支援学校体育館

東北福祉大 防災教育事業展開

学生主体 啓発に力

6000人超が携わる

同大のボランティア活動は、1993年度に単位認定も含めてカリキュラム化された。95年の阪神・淡路大震災以降、被災地での国内外でボランティア活動を続けてい

企画や運営協力

同大が展開する活動プログラムは①同大が考案したエコノミークラス症候群予防体操「さんあい体操」②〇×形式で自然災害や防火、放射能に対する知識を問う「減災〇×クイズ」③車いす利用者支援しながら避難する「避難リレー」④非常持ち出し袋に指定の避難グッズを詰め、視覚障害者を誘導する「災害時借り物競争」⑤防災をテーマにしたヒーローショー「防災レンジャー」など。

考える

近年、力を入れている防災・減災教育事業では、宮城県内外の小中学校や地域などを訪れて体験やゲームを取り入

大学を挙げてボランティア活動を展開する東北福祉大(仙台市青葉区)が地域や教育現場で実践する防災・減災教育事業の取り組みを強化している。事業は学生主体で行われ、地域住民や子どもたちの防災意識向上に努める。東日本大震災の教訓の伝承と防災啓発の強化を目指す連携組織「みやぎ防災・減災円卓会議」が6月23日に初めて開催した「防災運動会」でも企画や運営に全面協力した。

(防災・教育室 北條哲広)



防災運動会で披露された「防災レンジャー」ショー。6月23日午前、仙台市青葉区の宮城教育大付属特別支援学校体育館

「運動会」に協力 地域へ波及

体操や〇×クイズ、避難リレー

6月にあった防災運動会では、会場となった宮城教育大付属特別支援学校体育館(仙台市青葉区)に学生ら約30人が集まった。運動会には円卓会議に登録する大学、行政、企業など90団体から集まった約130人が参加し、学生らは司会進行を担当したほか、さんあい体操、減災〇×クイズ、災害時借り物競争、避難リレーの準備も早朝から進めた。

試行錯誤続ける

学生リーダーで、司会を務めた総合福祉学部4年の中野渡昂貴さん(22)は「防災運動会では普段、子ども向けに実施しているプログラムを大人に体験してもらうというところでとても緊張した。楽しみながら防災・減災を学ぼうという私たちの思いは伝わったのではないかと」と満足げ。

伝える

伝える

2011.3.11

宮古市田老の消防士小林徳光さん(57)は、東日本大震災の日、高齢者の手を引いて避難する途中で津波にのまれた。津波に幾度も襲われた地域で先人の教訓を受け継いできたが、被害は想像をはるかに超えた。「まずは高台へ」との鉄則を改めて呼び掛ける。



小林徳光さん

避難誘導中に津波にのまれる (宮古市田老)



地震発生時は当時勤務していた宮古消防署田老分署にいました。署員は三手に分かれ、2人は北部の携待地区、3人は田老地区の水門などに向かい、自分を含むうらに救助対応のため署に残りました。無線で情報収集しているさなかでした。外の様子を見ていた分署長が津波だ、逃げる」と叫びました。にわかには信じられません。分署は海から600mほど

「まずは高台へ」鉄則



震災直後の宮古市田老地区。津波は防潮堤を越えて市街地をのみ込んだ。2011年3月15日

ど。田老は万里の長城に例えられる防潮堤があり、でも高い所に、と参道沿いの畑を山方向に向かいました。外に出ると空は赤く、強い風が吹き、鳥が転がるように飛ばされている。昔話

んだ漫画に出てきた「津波風」そのものでした。つえを突いている高齢の男性を見つめ、腕を引いて一緒に真手の熊野神社の参道に逃げようとした。30秒ほど水が引きましたが、男性の姿が見えませんでした。

先に避難した分署長や署員、住民らに引張ってもらい、何とか参道に上がりました。町は破壊され、信じられない光景でした。男性は後日、遺体で見つかりました。救助する仕事なのに、助けられなかった申し訳なきが今もあります。水門などに向かった署員3人も犠牲になりました。

田老地区で代々暮らし、明治三陸大津波で先祖一家は1人を残し全員亡くなりました。その1人も、養子を迎えて子孫を残した後、昭和三陸津波の犠牲になりました。「命でんんこ」は重要ですが、震災を経験した今、一人一人がいかに具体的な避難行動を取れるかが大事だと痛感します。

沿岸部の住民だけでなく、観光や仕事で滞在する人も、いざという時は避難最優先という意識が必要で、教訓を伝承し、自分ができることに取り組みたいと思います。

災害と自治体職員の疲弊

「復興の先兵」休息を

近年では災害が発生すると、住民の心の問題が必ず取り上げられるようになった。大規模な災害の場合には、被災住民への「心のケア」を行うべく専門的な組織が立ち上がることもある。

こうした動きは阪神大震災が契機となったが、当時問題となったのは被災住民

ばかりではなかった。救援活動に赴いた消防隊員や自衛隊員のメンタルヘルスもまた大きな問題となった。長引く救援活動、悲惨な現場、職務が全うできなかつた自責感など、救済者を巡るトラウマ(心的外傷)である。

もう一つは、自治体職員はいわば「復興の先兵」であって、彼らが疲弊して倒れてしまえば復興どころではない。またまた道のりは長い。

探る

福島県立医大「災害こころの医学講座」主任教授 前田 正治さん



また、まはるは、久留米大医学部卒、同大医学部准教授を経て、13年から現職。01年米ハイツ沖で起きたえいめい丸事故、10年の宮崎県口蹄疫(こうていえき)問題などで被災者の心のケアに従事。専門は災害精神医学など。北九州市出身。58歳

は、もっぱら災害急性期に活動に赴いた消防隊員や自衛隊員のメンタルヘルスもまた大きな問題となった。長引く救援活動、悲惨な現場、職務が全うできなかつた自責感など、救済者を巡るトラウマ(心的外傷)である。

われわれが福島県の被災地自治体で行った調査でも、うつ病に罹患した職員は、きつりと休息を取ることが、自分の健康を保つための第一歩ではない。住民のためにも、公務員であること

を忘れて休む時間を確保してほしいと、切に願っています。

震災後にBCPを見直し

復建技術コンサルタント(仙台市)営業情報課長 佐藤 雅士さん(47) 地震や豪雨などの災害時に道路や橋を点検する仕事をしています。昨年、企業の業務継続計画(BCP)や地震メカニズム



を学ぶ県の講習会に参加し、防災指導員の認定を受けました。東日本大震災前に策定していたBCPは、震災時に機能しませんでした。想定外の大規模災害で移動手段が

途絶え、社内の指揮命令系統が崩れました。BCPを見直し、非常用電源や防災グッズの充実に加え、災害調査に出動する社員の食糧確保など後方支援も明記しました。安否確認テストも実施し、計画が絵に描いた餅にならないよう備えを強化しています。

現場から

自主防災組織の強化重要

気仙沼市危機管理監 庄子 裕明さん(59) 気仙沼市内にある93カ所の指定避難所の環境整備を進めています。東日本大震災後に整備された新たな施設の活用策などについても、検討していく予定です。



災害発生時には、近隣の方々が互いに協力し合い、安全確認や避難誘導などの防災活動に取り組むことが必要です。活動の中核を担う自主

防災組織の強化は不可欠になります。実際に災害が起きた場合、時間帯などに応じて、市が指定した避難所ではなく、地区ごとに定めた一時避難所を活用することも考えられます。日頃から地域ごとに場所などを確認しておくことが重要です。